

魚と水

Uo to Mizu



51-4

目次

宮腰研究主幹、水産学会水産学技術賞、道総研理事長賞を連続授賞！ —地道な研究の積み重ねの大切さを改めて振り返って—	・・・・・・・・小林 美樹	1
「第 19 回ワカサギに学ぶ会」に出席して	・・・・・・・・真野 修一	2
漁川におけるサケ稚魚とサクラマス稚魚の出現時期	・・・・・・・・安藤 大成・飯嶋 亜内・安富 亮平・下田 和孝・ 春日井 潔・隼野 寛史・佐々木 義隆	6

宮腰研究主幹、水産学会水産学技術賞、道総研理事長賞を連続受賞！

—地道な研究の積み重ねの大切さを改めて振り返って—

小林 美樹

さけます内水試さけます資源部宮腰研究主幹が、平成25年度水産学会水産学技術賞と平成26年度北海道立総合研究機構職員理事長賞(写真)を授賞しました。研究名は「サケマス資源の増殖保全技術の向上に関する研究」で、主幹がこれまでにやってきたサクラマスの漁獲尾数、釣獲尾数の推定や遡上親魚、降海幼魚の推定に加え、北海道で自然産卵が行われている河川数を明らかにするなどの一連の業績に対して与えられたものです。これら詳細は、「さけます内水面だより」等に詳しいので、割愛させていただきます。ここでは、彼の昔を少し振り返って、今があるベースについて、小職の思うままに書き留めてみました。

今回の連続受賞は、彼の今までの地道な研究の積み重ねであるとともに、彼の常に積極的で前向きな姿勢が生んだ結果ともいえると思います。昔をたどれば、彼は旧道立水産孵化場森支場(元道南支場森試験池)配属をスタートに、そこではサケや池産サクラマス飼育管理業務にどっぷり携わる傍ら、研究機関である現場が行政とタイアップしながら実施している事業の推進とは別に研究を発展展開させるためには、何をすべきか悩まなければならないのかなど自問自答しながら、次配属先である旧増毛支場(元道北支場)で、その花が開き始めたと言っても過言ではないでしょう。当時、行政も含め、現場では池産サクラマスを使った当該魚種資源の増大に向け、職員皆一丸となって努力していた時期です。しかし、職員皆研究職でありながら、サケの

放流事業、池産サクラマスの飼育放流事業と、研究よりも事業のウエイトが極めて大きい時代で、なかなか研究業務までをもこなすだけの時間はもちろん、体力と精神力を常に保持し続けることは並大抵なことではありませんでした。しかし、その中であって、彼は、事業で最も重要視される「放流」という行為の実施だけでなく、放流したものがどのように対象とする魚種の資源全体に貢献しているのかなどを客観的に評価することが次につなげるためにも如何に重要かを、自らの身体にむち打って、独自に調査データを取得積み重ね、サクラマスにかかる評価法の基礎を作り、我々に示してきたと言えます。

それからの彼は、様々に研究展開し、今日に至っており、後生につなげることはもちろん、道民のためになる研究の展開を・・・と常に模索しています。時代とともに求められるニーズも変遷を繰り返しますが、研究者たる我々は、目先の問題を解決するだけにとどまらず、それらニーズの更なる先を見通した上で研究を組み立て、進展させていくことが大切です。これからも彼の活躍を大いに期待したいところです。

(さけます資源部 こばやし みき)



平成26年度 地方独立行政法人北海道立総合研究機構職員表彰 平成26年10月7日 於 森京王プラザホテル札幌

「第19回ワカサギに学ぶ会」に出席して

真野 修一

平成27年1月22日、青森県青森市にある青森県庁大会議室において「第19回ワカサギに学ぶ会」が開催されました。今回は青森県の主催で、水産総合研究センター、国立環境研究所の他、全国12道県から約60名が参加しました。

会は青森県産業技術センター 内水面研究所 兜森 括 研究管理員の司会により進行されました。初めに、青森県産業技術センター 内水面研究所 上原子 場長から主催者代表としての挨拶がありました。その後、公設試験研究機関や漁業協同組合から7題の話題提供がありました。概略は以下のとおりです。



写真1 挨拶をする上原子場長

話題提供

① 網走湖におけるワカサギの生息環境と資源管理

真野修一

(北海道立総合研究機構 さげます・内水面水産試験場)

- ・網走湖は北海道東部に位置する汽水湖で、道内では最も漁獲量が多い。
- ・ワカサギの生息環境は淡水と汽水の微妙なバランスの上に成り立っている。
- ・稚魚期の密度指数から漁獲量を予測してきたが、近年、漁獲量が予測値を下回る年が多くなり、両者の相関関係に変化が見られた。
- ・7月中旬、8月上旬、8月下旬に湖内14ヶ所での曳き網により漁獲された魚から稚魚分布指数を算出した。
- ・西網走漁業協同組合から漁獲量データを入手し、得られた稚魚分布指数との相関関係を検討した。

- ・1987年から2012年までのデータを用いると両者の相関係数は低かった。
- ・データを1987年から1999年までと、2000年から2012年までに分けると相関係数はそれぞれ高くなった。
- ・今後は2000年以降の回帰式を用いることにより、漁獲量の予測精度が向上すると考えられた。
- ・北海道開発局網走開発建設部より提供された塩淡水境界層深度の推移を見ると、2000年前後を境に浅くなっていた。
- ・2000年以降は塩淡水境界層の上昇によりワカサギの生息空間が狭められ、稚魚分布指数が過大評価され、漁獲量の予測値が高く算出されていたと考えられた。
- ・今後も、持続可能な漁業のために湖内環境や資源動向を継続して監視していくとともに、稚魚分布指数と漁獲量との間の関係変化を生じさせる要因を探索する必要がある。

② 八郎湖におけるワカサギ漁獲状況と建網調査結果について

高田芳博 (秋田県水産振興センター)

- ・八郎湖は秋田市の北方約20kmに位置し、八郎瀧の干拓によって残存した淡水湖である。
- ・かつてはヤマトシジミが大量発生しその漁獲量が10,000トンを超えたこともあったが、現在の主な漁獲物はワカサギ、シラウオ、コイ、フナ等である。
- ・ワカサギの年間漁獲量は、近年200~300トンと安定しているおり、その7割が「しらうお機船船びき網」で漁獲されている。
- ・操業期間や操業時間の制限により安定した漁獲量につながっていると考えられる。
- ・資源状況や成育状況を把握するため、2014年6~11月まで毎月1回、わかさぎ建網による漁獲調査を実施し、ワカサギ0歳魚の入網尾数と体長の推移を調べた。
- ・ワカサギ建網1袋当たりの入網尾数は、7月には最近5年間の平均的な水準であったものの、9~10月にかけては2012年に次いで低い水準であった。
- ・一方、0歳魚の体長推移から9月上旬以降に明瞭な成長が見られ、2011年に次いで大型であった。
- ・ワカサギの成長には水温とカイアシ類幼生の出現量が影響を及ぼすと報告されていることから、これらとの関係について検討を行った。



写真2 会場の様子

- ・2014年の表面水温は、6月以降平年値をやや上回っていたものの、8月、10月は平年値を下回っていた。
- ・カイアシ類幼生の出現数は6月と8月に一部の調査定点で平年値を上回っていたが、10月には全定点で平年値を下回っていた。
- ・秋季におけるワカサギの良好な成長は、餌料となるカイアシ類幼生はそれほど多くなかったものの、水温が平年より低めで推移したことに加え、資源水準が低めであったことによる密度効果が要因として考えられた。

③ 群馬県におけるワカサギ増殖の課題と問題点

久下敏宏・渡辺 峻 (群馬県水産試験場)

- ・群馬県において、ワカサギは冬季の貴重かつ重要な遊漁対象魚種である。
- ・県内約20水域のワカサギ漁場は、主に地勢的な観点から、高冷地天然湖、多目的人工湖、農業用溜池、低地天然湖の4つに類型化できる。
- ・群馬県水試では、これら漁場の環境特性を明らかにしながら管理者とともに本種の増殖に取り組んできた。
- ・これまで、資源の高位安定化を目指して、ふ化管理技術の確立、減耗要因の解明、適正放流数の算出、を主な到達目標として試験、調査を行ってきた。
- ・近年、ビン式孵化器を導入することで、従来からの方法に比べて明らかに資源添加量が安定化してきている。
- ・しかしながら、稚魚期における原因不明の大量減耗など解決すべき点は多く残されており、適正放流数を算出する際の前提となる環境収容量を把握するまでには至っていない。
- ・福島原発事故にともなうワカサギの放射性セシウム濃度が基準値を下回ってきたが、食用に供することのできない状況(県の出荷自粛要請)が続いている。
- ・今後、増殖現場の状況に即した手法を管理者と検討、環境DNAや胃内容物DNAによる魚種判別の研究、関係者

の協力を得ながらデータを収集しモデル化、各分野の研究者と連携して現地調査を推進していく予定である。

④ 芦ノ湖におけるワカサギ漁獲量と採卵量の推移

結城陽介 (芦之湖漁業協同組合)

- ・芦ノ湖では1993年から2000年にかけて、定置網によるワカサギの漁獲量が年間0.03~1.3t、採卵数が0.01~1.4億粒で、ともに低位に乱高下を繰り返していた。
- ・しかしながら、従前の搾出方による採卵に替えて2001年からは当組合で開発した水槽内自然産卵法を本格的に開始したところ、効率的な採卵を行えるようになった。
- ・その結果、2002年には漁獲量が3.4t、採卵数が7.1億粒と飛躍的に増加し、以後2014年まで漁獲量は2.2~6.7t、採卵数は6.3~13.8億粒で高位安定に推移しており、芦ノ湖における漁業、遊漁の資源確保に貢献してきた。
- ・現在では漁獲・採卵のさらなる増大を目標に、定置網の改良をはじめ、親魚運搬技術の向上や孵化仔魚への初期給餌等を試行している。

⑤ 富士五湖におけるワカサギ漁業実態

谷沢弘将 (山梨県水産技術センター)

- ・富士五湖では、ワカサギ、ヒメマス、ヘラブナ、オオクチバス等の漁業が行われているが、その漁業の形態や漁獲量、流通等の実態はほとんど明らかになっていない。
- ・今後行うべき技術開発や指導支援の方向を明らかにすることを旨とし、漁業実態調査、遊漁実態調査を行った。
- ・漁業実態調査は漁業者へのアンケート、遊漁実態調査は釣り舟業者へのアンケートをとりまとめた。
- ・本栖湖のワカサギは漁業権魚種であるが、漁業実態がほとんどないため、比較からは除外した。
- ・山中湖、河口湖、西湖、精進湖において、ワカサギは漁業者の最も重要な漁獲対象魚で、年間漁獲量は山中湖が突出して多かった。



写真3 谷沢さんの発表

- ・漁獲魚の利用は自家消費が最も多かった。
- ・山中湖では漁獲魚の販売先のない人が多い反面、ワカサギに対する需要は高く、需給のアンバランスが認められた。
- ・ボートを利用した遊漁者の対象魚種におけるワカサギの割合は、山中湖、精進湖、西湖、河口湖の順に高かった。
- ・年間遊漁者数、1人当たりの平均釣獲尾数は、山中湖、精進湖、西湖の順に高く、湖全体の年間推定釣獲尾数は山中湖が突出して多かった。
- ・ワカサギ釣りは利用者にとって気軽に楽しむことができ、提供側も利益を生み出しやすいため、遊漁利用が促進したと推察された。
- ・山中湖、精進湖、西湖ではワカサギ放流数に対する漁獲尾数と釣獲尾数の割合が算出された。
- ・近年のワカサギ漁業実態が明らかとなり、現状を把握し、今後さらにより漁場環境を作っていく必要がある。

⑥ 諏訪湖におけるワカサギのふ化日と初期餌料との関係について

星河廣樹（長野県水産試験場）

- ・諏訪湖でのワカサギおよび動物プランクトンへの温暖化の影響把握並びに、影響を緩和する適応策の開発を目的に研究を進めている。
- ・ワカサギ稚魚サンプルは2013年、2014年の3月下旬から7月中旬までに各旬に1回高浜沖、湖心の2地点の表層部において稚魚ネットでの200mの曳き網により採集した。
- ・採集したサンプルの耳石解析による日齢査定およびふ化日の推定を行った。
- ・解析は調査回ごとに50個体程度、それに満たない回は全サンプルを対象に実施した。
- ・調査回ごとに日別のふ化数を耳石解析数と採捕数の比率に応じて乗算し、調査回ごとのふ化日組成を推定した。
- ・全調査回のふ化日組成を合計することで、稚魚ネットで採捕した全個体のふ化日を推定した。
- ・漁協が受精卵からふ化放流させた稚魚については、卵管理日誌を用いてふ化日を推定した。
- ・同時期に湖心でプランクトンネットを用いてプランクトンを採集し、種組成と現存量を調べることでワカサギの孵化器における湖内のプランクトン密度の推移を調べた。
- ・2013年、2014年に稚魚ネットで採捕された魚のふ化時期は両年とも4月中旬から6月上旬までと推定され、ピークは2013年は5月中旬、2014年は4月下旬と2旬の差が見られた。
- ・漁協が放流した稚魚の多くは2013年は3月中下旬および4月下旬から5月上旬の2期間に、2014年は3月下旬および4月下旬から5月上旬の2期間にふ化したと推定され



写真4 星河さんの発表の様子

- た。
- ・採捕稚魚および放流稚魚のふ化日組成を比較すると、両年とも稚魚ネットでは3月にふ化した個体は確認されず、漁協が3月に放流した稚魚は生残できなかった可能性が高い。
- ・プランクトン調査の結果、稚魚ネットで採捕した稚魚の推定ふ化日組成と、特にツボワムシ密度の推移に一致が見られた。
- ・ツボワムシは3月には未発生で、3月に放流された稚魚の初期減耗要因が初期餌料とのミスマッチである可能性が示唆された。

⑦ 十和田湖におけるワカサギの産卵

前田 穰（青森県産業技術センター 内水面研究所）

- ・十和田湖は、青森県と秋田県に跨るカルデラ湖で、流入河川は12、流出河川は奥入瀬川のみである。
- ・銚子大滝があるため、奥入瀬川からの魚類の遡上は無く、放流が行われている以前には魚類は生息していなかったと考えられている。
- ・現在、ワカサギ、ヒメマス、サクラマス、イワナ、コイ等の生息が認められるが、これらは1880年代以降に移植されたものとされている。
- ・1926年にワカサギの放流を行った記録はあるが、それ以降の57年間、放流及び漁獲の記録はない。
- ・1983年には数十尾が確認され、翌年には4トン、翌々年には84トンが漁獲され、その後の漁獲量は0.7~142トンの間で大きな変動を繰り返している。
- ・十和田湖でのワカサギの産卵場所、産卵時期については、断片的な報告はあるものの、調査が容易である南岸と西岸に流入する河川に限られており、北岸に流入する河川についてはなされていなかった。
- ・2012年に十和田湖に流入する全ての河川において産卵状

況の調査を行った。

- ・十和田湖では「ふくべ網」とよばれる小型の定置網で産卵のために河川に來遊するワカサギを漁獲しており、産卵が盛んに行われた年は漁獲量が多くなる。

- ・2012年のワカサギの漁獲量は40トンであり、1984年以降で7番目に多かったため、産卵場所を探すには適した調査年であった。

- ・ワカサギ卵は9河川の堰堤などの落ち込み部分、適度な流れのある平坦部分、波によって底石が寄せられて浅くなった河口部分で観察され、流れの淀んだ部分や河口付近の湖岸ではワカサギの來遊があっても、卵は確認できず、産卵場所は適度な流れのあるところ限定されているものと考えられた。

- ・ワカサギ卵は5月9日から7月19日まで確認され、7月19日の卵は全て発眼期にあったため、産卵は7月初旬に行われたものと考えられた。

- ・6月28日の早朝に、銀山沢の河口域において、約150尾のワカサギが群れを形成しているのを観察し、28日昼にこの場所で大量のワカサギ卵を確認した。

話題提供のあと事務局から来年度は秋田県が幹事となって開催されることが提案され、拍手により承認されました。これを受け、秋田県水産振興センター 高田 主任研究員からご開催に向けての挨拶をいただきました。

また、水産総合研究センター 増養殖研究所 中村 生態系保全グループ長より話題提供についての講評と、ワカサギという魚にはまだまだ大きな伸びしろがあるため「ワカサギ研究会」という新たな研究グループを発足させ研究を進展させていきたいとお話がありました。

閉会后、会場をウェディングプラザ・アラスカへ移して意見交換会が行われました。会は青森県産業技術センター内水面研究所 兜森 総括研究管理員が進行役となり、この会の設立時に中心的な役割を果たした北海道立総合研究機構 鳥澤 水産研究本部長からのご挨拶と乾杯のご発声により始まりました。その後は、様々なおいしい青森県産のお料理やお酒をいただきながら、会議の場では話し足りなかったことも含めて活発に語り合いました。

小川原湖漁業協同組合 細井 会計主任からの中締めのご挨拶と一本締めの後はいくつかのグループに分かれ、さらに長い間青森の夜を楽しく過ごしました。

(道東内水面室 まの しゅういち)



写真5 乾杯の挨拶をする鳥澤本部長



写真6 意見交換会会場の様子



写真7 中締めの挨拶をする細井会計主任

漁川におけるサケ稚魚とサクラマス稚魚の出現時期

安藤 大成・飯嶋 亜内・安富 亮平・
下田 和孝・春日井 潔・隼野 寛史・佐々木 義隆

恵庭市内を流れる漁川（いざりがわ）は石狩川支流千歳川の支流であり、河川名はアイヌ語のイチャン（サケやマスが卵を生む場所）に由来しているといわれています。その由来のとおり、都市部を流れる河川にも関わらず、サケやサクラマスの遡上が橋の上からでも眺めることができ、秋には市民の目を楽しませてくれます。

漁川には子供たちへの社会教育を目的としたサケやサクラマスの放流が実施されていますが、回帰してくる親魚は、ウライなどで捕獲されることがないため9～10月には自然産卵する親魚のペアや産卵床が川の随所で見られます。特にサケの場合、産卵時期は長期間（9～12月）に及ぶことが知られています。また、産卵床から出てきたサケ稚魚は春に海へと降り、数年後には親魚となって帰ってくるので、放流に由来しない自然産卵している親魚もかなりの数に上ることが予想されます。

現在行われているサケの増殖事業は、自然産卵しているサケの生態を参考に改良を行ってきた点が多々あるので、自然産卵しているサケの親魚や稚魚の情報を集めることはサケの増殖事業にも有効に活用できると考えられます。これはサクラマスについても同様と思われる。

そこで、漁川において自然産卵した親魚に由来するサケとサクラマスの稚魚がいつの時期にどのくらい出現しているのかを調査しました。

漁川に調査定点を設定し、電気漁具を用いて川岸から稚魚の採集を行いました。調査は2013年12月11日から2014年6月18日まで行い、12月は2回（12月11日と12月25日）、2014年に入ってから週1回の頻度で24回の調査（計26回）を行いました。なお、2014年は4月17日に子供たちによるサケ稚魚の放流（約9,000尾）が行われており、今回設定した調査定点は放流地点より下流域も含んでいるため、4月17日以降の調査では放流魚が含まれている可能性もあります。サクラマスにおいては、6月下旬から放流が行われており、放流前に調査を終えることができました。採集した稚魚は実験室へ持ち帰り、麻酔を弱くかけて魚種を判別し、採集した全個体について尾又長と体重を測定後、漁川へ放流しました。なお、サクラマスは成長に伴い、体サイズによる0+魚と1+魚の判別が難しくなるため、今回は尾又長8cm未満の個体を便宜的に

0+魚とみなし、8cm以上の個体は解析から除外しました。

全期間を通して、サケの稚魚は5,707尾、サクラマスの稚魚は1,919尾採集できました。サケの稚魚は12月11日に1尾が採集されたのを皮切りに徐々に採集尾数が増えましたが、5月中旬以降から採集尾数は減少し、6月11日に8尾が採集されたものの、6月18日の調査では採集できませんでした（図1）。サケの稚魚が

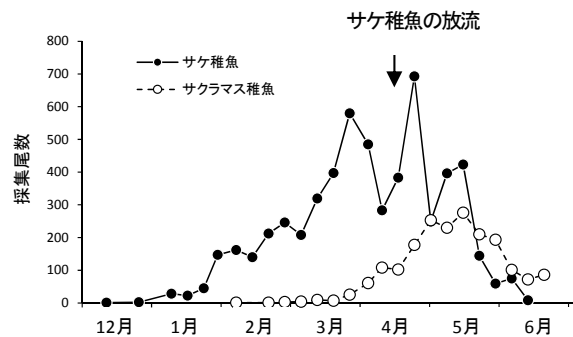


図1 サケとサクラマス稚魚の採集尾数

出現した期間は12月11日から6月11日までの約6ヶ月（182日）に及びました。一方、サクラマスの稚魚はサケの出現より1ヶ月以上遅い2月5日に最初の1尾が採集されました。その後、採集尾数は徐々に増加し、5月中旬に276尾が採集された後、徐々に採集尾数は減少しました。サクラマスは浮上してから最低でも1年間を河川で過ごすので、調査時期の後半に採集尾数が減少するのは、成長に伴い調査定点外へと稚魚が分散していくためだと考えられます。

また、12月1日から6月30日まで自記記録計を設



図2 自記記録計で観測した漁川の水温変化

置し、水温を観測しました(図2)。記録した水温(1時間ごとに記録した値の1日平均)は調査開始時の12月11日で5.2℃、終了時の6月18日で13.0℃でしたが、調査期間全体で見ると最低水温は2月8日の1.5℃、最高水温は6月4日の16.3℃となっています。

サケ稚魚の平均体重は、まとまった採集尾数(20個体以上)が得られた1月以降と比較すると、1月から3月上旬までは0.29~0.31gと0.3g前後の小さいサイズを示しましたが、その後、徐々に平均体重は増加し、4月中旬には0.42g、4月下旬には0.60gとなり、6月上旬には0.80gにまで達しました(図3)。一方、サクラマス稚魚の平均体重は4月下旬まではサケ稚魚よりも小さいサイズでしたが、5月に入ると急成長し、サケ稚魚よりも大きいサイズとなっており、6月中旬には平均体重は3g前後まで達していました。採集尾数全体で見るとサケ稚魚の体重は0.16g~3.21gの範囲であり、2g以上の大型稚魚も17尾採集されました。

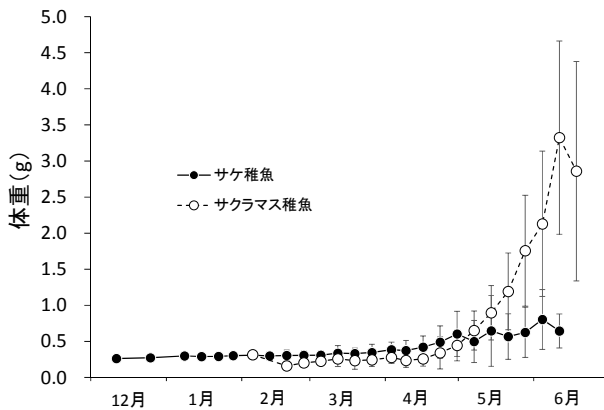


図3 サケとサクラマス稚魚の体重の推移。バーは標準偏差。

採集したサケ稚魚の尾又長を5mm毎に区切り、体サイズ別の出現頻度を月ごとにまとめてみました(図4)。月を追うごとに標準偏差も大きくなり、サイズのばらつきが大きくなっていることがわかります。しかし、1~5月にかけて主体となっているのは35~40mmの比較的小型の稚魚で、この調査定点内ではあまり成長せずに速やかに下流へ稚魚が移動し、新たな稚魚が上流から移動してきているものと推定されます。

今回の調査から、サケ稚魚は3月~4月に出現の盛期を持つものの、6ヶ月以上の長期間にわたり出現していることがわかりました。しかし、漁川の親魚の産卵時期も長期間に及ぶため、採集された稚魚が前年のどの時期に産卵されたのかは特定できません。一方、

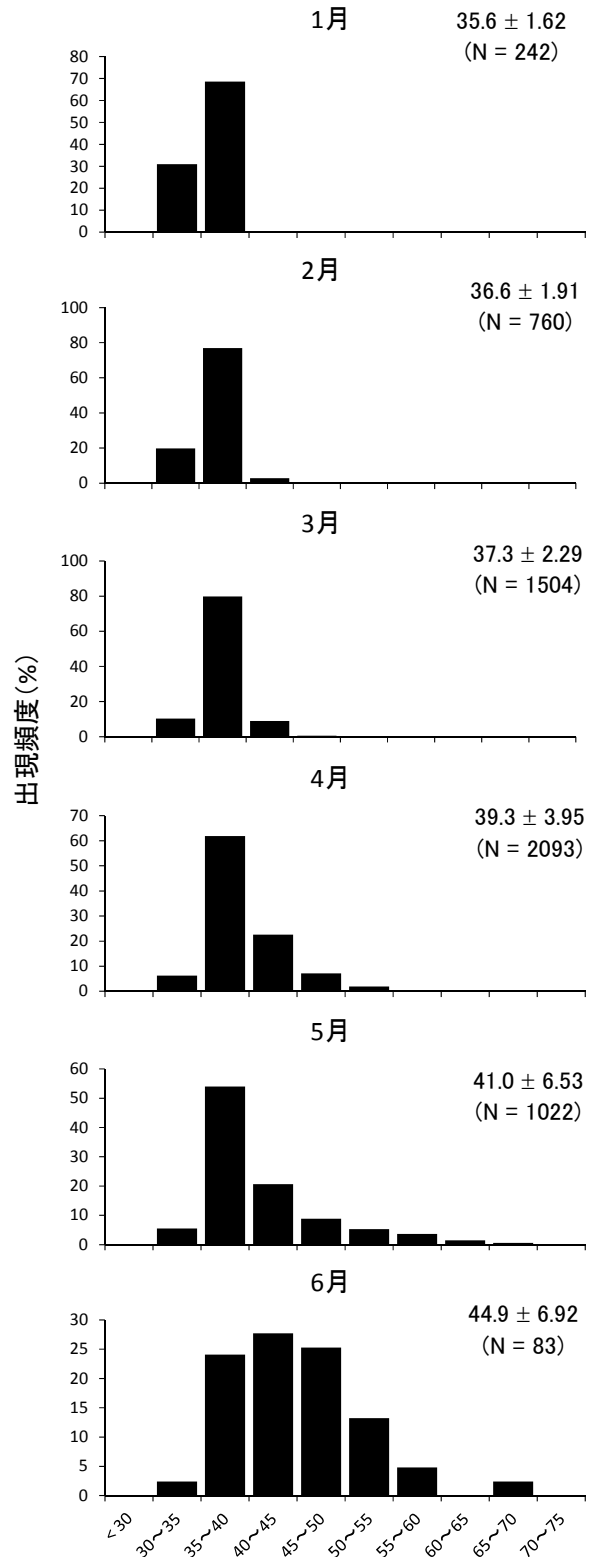


図4 サケ稚魚における体サイズ別の出現頻度。各グラフの右上の数値は平均尾又長±標準偏差、括弧内の数値は採集尾数を示す。

サクラマス親魚の産卵盛期は9月下旬ころと考えられ、サケに比べると短いため、サクラマス稚魚の出現動向

を解析することはサケ稚魚の生態を解明するのに一役買う可能性も考えられます。

日本海に注ぐ千歳川ではサケの増殖事業が古くから行われ、毎年多くのサケ稚魚が放流されています。放流に適した時期は、河川水温や海洋環境などから3~4月と考えられています。漁川のサケ稚魚の採集尾数は1月と2月で1,002尾（全採集尾数の17.5%）、5月と6月で1,105尾（全採集尾数の19.4%）であり、3~4月以外に採集される稚魚の尾数も多くいます。また、最も早くに採集されたサケ稚魚は12月11日でしたが、この稚魚はその後どのような生活を送っているのかも興味深いところです。逆に、6月に採集したサケ稚魚の尾又長は30~35 mmの小型魚もいれば、65~70 mmの大型稚魚もいて多様性に富んでいます。6月に採集した稚魚の中には卵黄嚢の吸収が途中の状態、腹部の縫合が完全でない小型稚魚も何尾か見受けられました。このような稚魚はつい最近、浮上してきた個体と思われまます。水温の立ち上がり早い日本海に注ぐ河川において6月に稚魚が浮上すること自体、かなり遅いような気がするのですが、漁川のサケ稚魚の出現時期は毎年、ほぼ同じ状況であることから12月や6月に出現するサケ稚魚も、我々の想像を超えた生き残りのためのノウハウを持っているのかもしれない。そのようなノウハウを解明できれば、増殖事業にも応用できる可能性があるのではないのでしょうか。

サケ稚魚の調査から学ぶことはまだまだたくさんありそうです。

（さけます資源部 あんどう だいせい・いいじま あない、内水面資源部 やすとみ りょうへい、さけます資源部 しもだ かずたか・かすがい きよし・はやのひろふみ、道東支場 ささき よしたか）

平成 27 年 3 月 10 日 発行

発行 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
さけます・内水面水産試験場
場長 永田 光博

編集 さけます・内水面水産試験場 出版委員会
恵庭市北柏木町 3 丁目 373
(電話 0123-32-2135)